

GTEC 及び TOEIC-IP の結果に見る、過去 3 年間の 小山高専生の平均点と受験者数の推移

有坂顕二^{*1}, 山西敏博^{*2}, 岡田晃^{*2}, 有坂夏菜子^{*2}, 杉山桂子^{*2}, 関根健雄^{*2}

A Report on the Changes in GTEC and TOEIC-IP Average Scores and the Number of TOEIC-IP Examinees in the Past Three Years

Kenji ARISAKA, Toshihiro YAMANISHI, Akira OKADA, Kanako ARISAKA, Keiko SUGIYAMA,
and Takeo SEKINE

This paper reports by each grade level the changes in GTEC and TOEIC-IP average scores and the number of TOEIC-IP examinees in the past three years. It is also considered based on the data shown here what they can tell us about students' motives to raise their awareness concerning English learning.

KEYWORDS : GTEC, TOEIC, institutional program (IP), average scores, intrinsically motivated, extrinsically motivated

1. まえがき

小山高専では平成 13 (2001) 年より TOEIC-IP を、主に高学年を対象に、加えて平成 18 (2006) 年より GTEC (本校で採用している試験の正式名称は、以下に述べるとおり GTEC for STUDENTS であるが、必要がある場合を除き GTEC と記す) を、1, 2 年生対象に実施してきた。本稿は主に、平成 23 (2011) 年度から平成 25 (2013) 年度までの GTEC と TOEIC-IP の試験結果、具体的には各学年の総合点の平均点の推移を報告し、更には同学年における全国平均点との比較を行う。加えて TOEIC-IP に関しては、学年、学科ごとの受験者人

数の推移も報告する。本稿で扱うデータは小山高専の本科 1 年生から専攻科 1 年生までのものであり、専攻科 2 年生のデータに関しては、平成 24 年度の受験者数が 4 名、平成 25 年が 1 名であったため、示さない。そして 5 節において、その結果に対し、考察を加える。

TOEIC とは Test of English for International Communication の略称で、英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価する世界基準のテストであり、各自の英語能力のレベルを客観的に数字で表すものである。平成 25 年度の実績によれば、高専生は、「公開テスト」で 7,674 名が受験しているのに対し、「団体特別受験制度 (以下 IP テスト)」では 16,364 名が受験している^{注1), 1)}。

*1 一般科 (Dept. of General Education), E-mail: arisaka@oyama-ct.ac.jp

*2 一般科 (Dept. of General Education)

公開テストは決まった会場で定期的実施され、申し込みは個人で行う。それに対し IP テストには、試験期日、試験場所が自由に決められ、申し込みは実施団体担当者がまとめて行い、受験料が安い一方、公式の認定書(Official Score Certificate)は発行されず、受験者個人には「スコアレポート」で点数が知られるという特徴がある。

ちなみに平成 25 年度に民間企業、官公庁、非営利団体などで実施された IP テストの受験者数と平均点等のデータから、高専を卒業した学生が就職すると考えられる職種の受験者数と平均点を挙げておく。「技術」部門からは 167,954 人が受験し、平均点は 458 点である。「製造」部門からは 37,242 人が受験し、平均点は 384 点。「研究」部門からは 38,234 人が受験し、平均点は 547 点となっている。

一方 GTEC は Global Test for English Communication の略称で、中学生・高校生向けの GTEC for STUDENTS は、読解力と聴解力、英作文力の 3 技能を測定し、それを絶対評価で示すものである。平成 25 年度の実績では、約 66 万人が受験している (<http://gtec.for-students.jp/index.htm> を参照)。

GTEC の特徴の一つとして、Advanced, Basic, Core という 3 つの試験のタイプから、受験者の学年や学力レベルに合わせて選択できるという点が挙げられる。各試験タイプの対象学年と上限スコアは以下の表の通りである^{注2)}。

表 1 各試験タイプの対象学年

GTEC for STUDENTS						GTEC	
Stage	中 1	中 2	中 3	高 1	高 2	高 3	大学 企業
Level & Type							
実績	●2013年度受験者数、66万人						

(http://gtec.for-students.jp/about/img/katuyou_2011.gif)

表 2 各試験タイプの上限スコア

●各技能の上限スコア

	Advanced	Basic	Core
リーディング	320	250	170
リスニング	320	250	170
ライティング	170	160	100
合 計	810	660	440

(<http://gtec.for-students.jp/about/img/jissi02.gif>)

次の表 3 は、2009 年において GTEC 受験人数が 100 名以上の学年を対象として、学年平均トータルスコアが 520 に到達した、東日本にある学校名のみ (スペースの関係上) 示したもののだが、各地の有名校と思われる学校が名を連ねており、それがテストの平均点を押し上げている可能性があることが予想される²⁾。

表 3 2009 年 GTEC 英語力優秀校 (東日本)

都道府県	学校名	学年(2009年度)
北海道	札幌東高等学校	2年生
北海道	札幌南高等学校	1年生/2年生
北海道	札幌北高等学校	2年生
北海道	函館中部高等学校	3年生
北海道	希望学園北嶺高等学校	1年生
青森県	青森高等学校	2年生/3年生
茨城県	土浦第一高等学校	1年生/2年生
茨城県	竹園高等学校	1年生/2年生
栃木県	栃木高等学校	2年生
群馬県	県立前橋高等学校	2年生
群馬県	前橋女子高等学校	2年生
群馬県	中央中等教育学校	1年生/2年生/3年生
新潟県	国際情報高等学校	3年生
埼玉県	大宮高等学校	1年生/2年生
埼玉県	慶應義塾志木高等学校	2年生/3年生
埼玉県	早稲田大学本庄高等学校	2年生/3年生
東京都	日比谷高等学校	1年生
東京都	小石川中等教育高等学校	1年生
東京都	お茶の水女大附高等学校	1年生/2年生
東京都	青山高等学校	2年生
東京都	大妻高等学校	2年生
東京都	学習院女子高等学校	2年生
東京都	田園調布学園高等学校	2年生
東京都	鷗友学園女子高等学校	1年生/2年生
東京都	田園調布雙葉高等学校	2年生/3年生
東京都	立教女学院高等学校	3年生
東京都	光塩女子学院高等科	2年生/3年生
東京都	本郷高等学校	2年生/3年生
東京都	江戸川女子高等学校	2年生
東京都	錦城高等学校	3年生
神奈川県	聖光学院高等学校	1年生/2年生
神奈川県	カリタス女子高等学校	3年生
神奈川県	鎌倉女学院高等学校	1年生/2年生/3年生
神奈川県	栄光学園高等学校	1年生/2年生
神奈川県	湘南白百合学園高等学校	2年生
山梨県	甲陵高等学校	2年生

(http://gtcc.for-students.jp/gtccmag/contents/img/vol_62_04.gifの表から、東日本にある高校のデータのみ転記)

本節の最後に、ベネッセコーポレーションのGTEC 担当者から提供を受けた、各種外部英語試験の試験結果間の相関表を挙げる。その信頼性に関しては多少、疑問の余地も残るが、何らか目安になるとは思われるため、掲載する。

表4 各種英語試験の相関表

スコア比較	GTEC for STUDENTS	TOEIC	TOFEL	英検
	800	709.7	543.0	準1級
	750	657.7	524.9	
	700	605.7	506.8	
	650	553.7	488.7	
大学入試センター試験	180~200点	591.4	492.7	2級
	170~179点	552.2	451.9	
	160~169点	515.3	413.6	
	150~159点	489.9	387.1	
	140~149点	463.9	360.1	
	130~139点	444.1	339.5	
	120~129点	428.7	323.5	
	110~119点	408.2	302.2	
	100~109点	392.5	285.9	
	90~99点	371.9	244.4	
英語得点	80~89点	354.4	246.2	準2級
	70~79点	343.4	234.8	
	60~69点	326.6	217.3	
	50~59点	299.9	189.5	
	0~49点	292.8	182.2	
			359.4	3級

(ベネッセコーポレーション提供)

2. GTEC の平均点の推移

小山高専では入学時の英語力を測定するため、1年生を対象に、前期中間試験中に Core タイプの試験を、そして約1年半後に、小山高専での英語学習の成果を測定するため、2年生を対象に、後期中間試験中に Basic タイプの試験を実施している。2節では、各タイプの試験における過去3年間の総合点の平均点の推移を示し、同学年の全国平均点との比較を行い、最後に各入学年度学生の平均点の伸びを算出し、提示する。

2. 1 Core タイプ試験の平均点の推移

まず平成23年度から平成25年度に入学した1年生の、Core タイプ試験（上限スコア：440点）の平均点の推移を表5に示す。

表5 Core タイプ試験の平均点

年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
平均点	370	366	357

表5を見ると平均点の微減が観察されるが、平成21年度のCore タイプ試験の平均点が約352点であったことを考慮すれば、誤差の範囲と言っても差し支えないであろう。

次に表6を見てみる。これは高校1年生のCore タイプ試験の総合点の全国平均点を年度ごとに示したものである。

表6 高校1年生のCore タイプの全国平均点

コアタイプ	高1全国	高1全国	高1全国
	平成23年	平成24年	平成25年
トータル	406	405	408

(ベネッセコーポレーション提供)

この結果を小山高専のそれと比べると、3~50点程度の差がある。しかし表3に見られるようにGTEC 実施校には普通高校、そしていわゆる進学校も多いと言っていることができる。そして当然のことながら、そのような高校には文系の生徒や、理系で言えば理学部や医学部を目指す生徒など、様々な希望を持つ高校生が存在し、そのような生徒たちがGTECを受験していることを考慮すれば、この程度の差が存在するのは宜なるかな、であろう。

2. 2 Basic タイプ試験の平均点の推移

次に平成23年度から平成25年度に実施されたBasic タイプ試験（2年生対象。上限スコア：660点）の平均点の推移を表7に示す。

表7 Basic タイプ試験の平均点

年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
平均点	420	404	414

次に2.1節同様、高校2年生のBasic タイプ試験の総合点の全国平均点を年度ごとに示した表を掲載する。

表8 高校2年生の Basic タイプの全国平均点

ベーシックタイプ			
	高2全国	高2全国	高2全国
	平成23年	平成24年	平成25年
トータル	443	445	445

(ベネッセコーポレーション提供)

ここで注目したいのは、2. 1 節で見たとおり、Core タイプ試験の小山高専1年生の平均点と、高校1年生の全国平均点の差は3～50点程度であったのに対し、Basic タイプ試験の小山高専2年生の平均点と高校2年生の全国平均点の差は10点程度縮まり、2～40点程度になっているという事実である。これは次の2. 3 節に示す結果と大いに関係している。

2. 3 各年度入学学生の平均点の伸び

2. 3 節では、平成22年度から平成24年度に入学した学生の、Core タイプ試験の総合点の平均点と Basic タイプ試験のその差、すなわち平均点の「伸び」について触れる。それを具体的に示したのが表9である(表9の数値のみ、小数点以下第一位まで記す)。

表9 各年度入学学生の各タイプ試験の平均点と点数の伸び

入学年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度
Core	368.8	369.9	365.5
Basic	420.4	404.4	414.4
伸び	51.6	34.5	48.9

平成25年度入学者に関しては、まだ本年度(平成26年度)、Basic タイプの試験を実施していないため、点数の伸びは算出できていないが、平成22年度入学生から平成24年度入学生までのデータを用いて計算すると、3～50点程度の伸びが見られるとの結果が得られた。これを上記の全国平均を表している表6と8から導き出される点数と比較すると、全国平均に関しては最大でも、平成25年 Basic タイプ試験の全国平均点から平成24年 Core タイプ試験のそれを引いた40点であり、小山高専学生のGTECにおける総合点平均点の伸びは、全国平均のそれを上回っている。

今回ベネッセコーポレーションから提供を受け

た Basic タイプ試験の全国平均点が3年分のみであるため、本稿では「過去3年分」の比較のみしている。が、実は平成21年度入学生の場合、Core タイプ試験の平均点が352.24点で、Basic タイプ試験のそれは412.16点、点数の伸びは59.9点であった。ベネッセコーポレーションでは、全国の平均的な「1年間」のGTEC総合点の伸びは35～40程度であるとしており、例えば2008年度から2009年度にかけて学年総合点平均点が60以上伸びた学校を「GTEC英語力向上校」として、ホームページに掲載している²⁾。小山高専の結果は「約1年半」の伸びに基づくものであるが、それでもこれは注目に値するものと思われる。

3. TOEIC-IP テストの平均点の推移

3 節では、小山高専におけるIPテストの総合点の平均点の推移を学年ごとに示していく。平均点の算出に関しては、TOEICの事業母体である国際ビジネスコミュニケーション協会が出している全国平均点と比較ができるよう、留学生の成績も含めて計算している。更には同じ学生が1年間に複数回受験している場合があるが、その場合も機械的に全ての点数を入れて平均点を出している。

IPテストの実施回数に関しての、ここ数年の実績は、希望者対象のIPテストを計2回、それぞれ6月末か7月初旬と12月中旬に実施し、一方、成績評価の一環として実施するIPテストは、前期定期試験中に「応用英語1」受講生対象に1回と、後期定期試験中に「英語演習Ⅱ」と「応用英語2」の受講生対象として1回の、計2回行っている。以下に小山高専の平均点として示す数字は、上記4回の試験の成績データを学年ごとに機械的にまとめ、算出したものである。

3. 1 本科3年生の平均点の推移

3. 1 節ではまず、平成23年度から平成25年度までの本科3年生の平均点の推移を示す。

表10 本科3年生の TOEIC-IP 平均点

年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
平均点	427	361	319

受験人数の推移については4節にて触れるが、3年生からの受験者は希望者のみであり、その数は毎年ほぼ2～30人程度なので、この平均点にそれほど信頼性があるとは思われない。しかし他学年の結果と比較する際、何らかの目安とはなろう。ちなみに平成23年度の平均点が非常に高くなっているが、これは3年生の受験生26名中、留学生が3名とバイリンガルの日本人学生が1名受験しているためであろう。比較のため、同期間、高専3年生の全国平均点がどう推移したかを示す表を、表11として挙げる^{1),3),4)}。

表11 高専3年生のIPテスト全国平均点

年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
平均点	332	324	320

ここで表11の平均点、及び以下に示すIPテスト全国平均点の算出方法に関し、注意すべき点があるのでここで触れておく。それは、平成23年度以前はTotalスコアの平均点が「Readingスコアの平均点+Listeningスコアの平均点」で算出されていたのに対し、平成24年度以降は、統計的観点から見直しが行われ、「Totalスコアの合計÷受験者数」により算出されているという点である⁴⁾。

3.2 本科4年生の平均点の推移

次に、平成23年度から平成25年度までの本科4年生の平均点の推移に関しては、表12に挙げるとおりである。

表12 本科4年生のIPテスト平均点

年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
平均点	357	373	338

3.1節の表10、並びに表12に共通して見られる傾向として、平成25年度において平成23、24年度のそれと比較して、平均点が下がっているという点が挙げられる。これは4節にてより詳細に示すが、3年生はここ3年間、受験者数はそれほど変わっていないのに対し、4年生は受験者数も平成25年度に減少している。4年生からは希望者のみ受験しているという事実を考慮すれば、5節に

おいて考察するが、これは「内的」動機を持つ学生数が減ってきていることを反映しているのではないであろうか（詳しくは5節を参照）。

表13は高専4年生の全国平均点の推移を表しており、表12との比較のために掲載する^{1),3),4)}。

表13 高専4年生のIPテスト全国平均点

年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
平均点	337	342	341

3.3 本科5年生の平均点の推移

3.3節では本科5年生の平均点の推移を示すが、以下の表14に見られるように、4年生の場合とは異なり、平成25年には平均点が前年度までと比べ、かなり上昇している。

表14 本科5年生のIPテスト平均点

年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
平均点	369	358	388

平成26年度以降の平均点を見るまで断定はできないが、これは、進学や就職におけるTOEIC（スコア）の重要性が学生により浸透してきたことにより、受験への意識が高まったことで、低学年の頃から「内的」動機のみにて着実に勉強してきた学生だけでなく、本科最高学年となり、進学や就職を意識した学生もが、「外的」動機を持つこととなり、このような結果が生じたのではないかと推測される。

高専5年生のIPテストの全国平均点を、これまでと同様、以下に示すが、平成25年度では小山高専の平均点の方が全国のそれを26点も上回っている^{1),3),4)}。

表15 高専5年生のIPテスト全国平均点

年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
平均点	369	358	362

3.4 専攻科1年生の平均点の推移

3.3節では、平成25年度における、それ以前と比べての、そして全国平均点と比較しての本科

5年生の平均点の上昇を、TOEIC への意識の高まりの結果だと主張した。そしてその根拠といえる事実が、3. 4 節で示す、専攻科1年生の平均点の推移である。表 16 を見てみよう。

表 16 専攻科1年生の IP テスト平均点

年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
平均点	379	415	440

比較のため、これまでと同様、全国平均点を掲載しておく^{1), 3), 4)}。

表 17 専攻科1年生 IP テスト全国平均点

年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
平均点	394	393	384

表 16 と 17 を比較して分かるように、小山高専専攻科1年生の平均点は、平成 23 年度こそ全国平均点よりも低かったものの、平成 24 年度は全国平均点よりも高くなり、平成 25 年度では更に高くなっている。平成 28 年度からは専攻科受験の際、英語の検査の代わりとして TOEIC スコアの提出が求められることにもなっており、専攻科では学生が、TOEIC (スコア) が重視されているという意識を共有していると考えられ、したがってこのような結果になっていると言ってよいであろう。そしてこの傾向は今後続くと考えられる。

国際ビジネスコミュニケーション協会は、大学生の各学年の IP テストスコアの平均点等も公開しているが、ちなみに情報科学系の大学3年生の IP テストの平均点の推移は以下の通りである^{1), 3), 4)}。

表 18 情報科学系の大学3年生の IP テスト全国平均点

年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
平均点	387	407	414

次の表 19 は、理・工・農学系の大学3年生の IP テスト全国平均点を示したものである^{1), 3), 4)}。

表 19 理・工・農学系の大学3年生の IP テスト全国平均点

年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度
平均点	409	402	405

前出の表 16 とこれらを比較して分かるように、平成 24 年度以降、小山高専専攻科1年生の IP テストの平均点は、情報科学系と理・工・農学系の大学3年生のその両方を上回っている。

4. TOEIC-IP テスト受験者数の推移

4 節では、平成 23 年度から平成 25 年度までの、各専門学科の IP テスト受験者数の推移を学年ごとに報告する。専攻科生に関しては、専攻科の必修科目である「応用英語 1」の成績評価の一環として、IP テストの受験を課しているため（前期定期試験中に実施）、全員が受験しているはずであり、そのデータは扱わない。

まず、表 20 を見てみよう。

表 20 各専門学科3年生の受験者数

	平成23年度	平成24年度	平成25年度
M(=機械)	8	20	19
E(=電気)	3	1	10
D(=電子)	11	5	0
C(=物質)	4	7	5
A(=建築)	0	2	1
合計	26	35	35

これは各学科の3年生の受験者数の推移を示した表であるが、3 節でも述べたとおり、3 年生からの受験者は希望者のみであるため、その総数は毎年ほぼ 2~30 人程度である。

後に示す表からも分かるのとおり、例年、本科において最も受験者数が多いのは機械科である。これは機械科が本科4年生対象に開講している「輪講」（後期科目：1 単位）の「評価方法」として、「TOEIC スコア 300 点を単位認定の要件とする」と規定しているためである。3 節でも触れたが、やはりこれが「外的」動機として学生に作用し、IP テスト受験を促す結果になっていると考えられる。

次に本科4年生の各科の受験者数の推移を表21に示す。これも3節で述べたが、平成25年度では、平成24年度までと比べ、受験者総数があきらかに減少している。

表21 各専門学科4年生の受験者数

	平成23年度	平成24年度	平成25年度
M	37	39	24
E	2	21	3
D	19	0	5
C	13	7	9
A	2	3	3
合計	73	70	44

一方、本科5年生に関しては、「英語演習Ⅱ」（半期科目：1単位）が本科5年生対象に選択科目として開講されており、その成績評価の一環としてIPテストの受験を課しているため（後期定期試験中に実施）、受験人数は3、4年生のそれよりも格段に多い。また進学・就職を控えており、進路先からの要請で、または重要な資格の一つと考え、TOEICを受験する学生も多いと思われる、この数字になっているのであろう。

表22 各専門学科5年生の受験者数

	平成23年度	平成24年度	平成25年度
M	34	23	27
E	34	21	17
D	30	26	5
C	31	22	14
A	30	14	22
合計	159	106	85

ただここでもやはり受験者総数の減少が観察される。この傾向の理由の一つとして考えられるのが学生の、公開テストへの関心の高まりであろう。実際ある5年生から、公開テストにて800点程度の点数を取ったと聞かされたことがあった。その学生は5年の他のクラスにも数人、同程度の点を取った学生がいるとも言っていた。3、4節にて、平成28年度より専攻科では受験の際、TOEICスコアの提出を求めることになっていると書いたが、実際に提出できるのは公開テストのスコアのみである。他に公開テストのスコアを求める進路

先もあるようで、IPテストよりも公開テスト受験により重きを置く学生の数が増えていることを示唆しているのではないだろうか（この傾向が全高専で見られることについては、注1参照）。

ただ5年生のIPテスト受験者数の減少は、同時に「英語演習Ⅱ」を選択する人数の減少をも意味する。5年生対象に開講される一般英語の授業は「英語演習Ⅱ」のみである。平成25年度では履修人数が5年全学生の半分に満たず、したがって5年生では一般英語の授業を全く受けていない学生の方が多いということを表している。

5. 考察

東京工業大学の三上教授は「GTEC 通信 Vol. 53」において、「以前卒業生対象に、大学での教育に対して追跡調査を行ったところ、専門分野の教育に関しては、「十分であり、社会に出てから困ることはない」との回答が多かったのに対して、英語に関しては、「もっと勉強しておけばよかった」という声のほうが多いという結果がありました」（下線は原文のまま）と書いている⁹⁾。この東京工業大学卒業生からの回答結果は、小山高専が行った卒業生に対するアンケートでも同様の回答が多数あったという事実を考え合わせると、工学を志す学生の傾向、嗜好に関し、とても興味深い示唆を与えてくれていると思われる。

いわゆる「零戦」の設計者である堀越二郎は、その著書『零戦 その誕生と栄光の記録』の中で自らの性格に関し、「私は、少年時代からどちらかというところではにかみ屋であった。私の武器は、納得がゆくまで自分の頭で考えることだった。裏づけのない議論のための議論はきらいで、実物と実績で見てもらいたいという主義だった」と書いている⁹⁾。堀越二郎も工学部出身であり、やはりもの作りを志向する学生には、自ら手を動かして作ったものや得られた結果自体に語らせ、それによって評価してもらいたいという傾向があると言ってよいであろう。よってもの作りが奨励される環境下では、それに特に集中してしまうのは宜なるかな、である。

しかしながら卒業後に、特に民間企業に所属した場合、学校では「個人」として扱われていた学生は「組織の一員」となる。民間企業は営利団体であり、効率的な企業活動のため、組織の意志を

統一する必要が生じ、したがって徹底した意志疎通が求められる。またどんなによいものを作ったとしても、それを消費者に「選んで」購入してもらえなければ企業は立ちゆかなくなる。したがってもので溢れかえる現代では、宣伝活動が不可欠となる。このように、実社会ではもの作りの過程の前後に「言葉」を使って自らの意志を伝えなければならない過程が存在し、そして組織の上層に進むにつれ、(組織が大きければ大きいほど) 実はその過程こそが重要であることが真に理解されるようになる。学生達もその過程の重要性は、漠然とは理解しているのであろう。しかし、一方でほとんどが、それは社会に出てからの話とも捉えており、したがって東京工業大生であろうが、小山高専生であろうが、「学生」として、自らが志向する対象に集中する、ということになる。

ここまではもの作りを志向する学生の一般的傾向について述べてきたが、「(基礎的) 英語力」という観点から見れば、東京工業大生と小山高専生との間には大きな差が存在すると言わざるを得ない。ではその差はどこから生じているのであろうか。やはり、大学受験を経験したかどうかという点と大いに係わっているといえよう。

小山高専生にも、東京工業大学に進学した高校生にも、誰にも何も言われずとも自ら勉強に励む学生/生徒が同程度の割合で存在すると考えられる(「優秀」という言葉は、評価を行う際に使われるものである)。ただここで問題となるのが、他から動機を与えられないと力が発揮できない学生/生徒も存在するという点であり、そのような存在も2つの学校に同じ割合でいると想定される。そしてそのような存在に「受験」は勉強をする動機(本稿ではこれを「外的」動機と呼ぶ)を与えてくれる。そして当然ながら自律的に勉強できる学生/生徒(本稿ではそのような存在は「内的」動機を持っているとする)の少なからずにも「外的」動機を与えよう。

受験、特に大学受験は日本における「通過儀礼」のようなものであると言う向きも多いが、良かれ悪しかれ受験により進学校には勉強しなければならないという雰囲気醸成され、そこに属する生徒は外的動機を(強制的に)持たされる。そしてそのことにより、これは単純に組み合わせ上の話ではあるが、勉強する動機のない学生の割合は全体の4分の1、逆に言えば全体の4分の3は何らか動機を持っていることになる(本稿で

は、「単位を取る」や「卒業する」は、勉強する動機としてはそれほど機能していないと捉えている)。結果として半分以上の数の生徒が、自分にとってそれほど興味のない科目であっても、(良かれ悪しかれ)受験のためという(外的)動機を持って取り組む、ということになる。

一方、小山高専生の場合、卒業後すぐに就職を希望する学生も多く(「もう勉強したくないから小山高専に来た」と公言する学生さえ、過去には存在した)、進路を意識する高学年生でなければ、前に述べたとおり、自らが志向する、もの作りという対象に集中するという傾向とも相まって、興味の向かない科目を勉強するために必要となる(外的)動機が持てない、持ちづらい状況にあると言えよう。そしてこれもごく単純に考えれば、勉強する動機のない学生の割合は、全体の2分の1となる(この想定がある程度正しいことは、特に一般科目において、定期試験の得点分布がいわゆる「ふたこぶ」の形になりやすいという傾向によっても裏付けられよう)。そして勉強する動機のない学生の割合は増えつつあり、一方、内的動機を持つ学生の割合は減っていると感じられる。その現れの一つが4年生でのIPテストの平均点の降下傾向と、IPテスト受験者数の減少傾向ではないだろうか。

ただ3.4節の専攻科1年生の例に見られるように、学生に「TOEIC(スコア)が重視されている」との意識が浸透すれば、すなわち外的動機が持てれば、TOEICの平均点は上昇傾向を示すことは明らかである。つまり、東京工業大生であれ、小山高専生であれ、適切な外的動機を設定し、それを与えることができれば、(英語の)勉強を促すことは可能だとの結論に至る。

では「適切な」外的動機とはどのようなものであろうか。自らが志向する対象に特に集中しやすいという小山高専生の傾向を考えれば、やはり自らの専門科目に係わるものであるべきであろう。加えて彼らには個人的な繋がりや交流を重んじる傾向も観察される。したがって4節の最後で触れたように、5年生では5年全学生中、一般英語の授業を全く受けていない学生の方が多いという現状を考えれば、まずは個人的な対応の可能な5年生の卒業研究の時間において、当然これまでも読まれてきたであろうが、英語の論文を読む、そしてこれまでよりも学生の英語力を伸ばしたいのであれば、これまでよりも多く読むということにつ

きる。

話はそれるが、我々英語教員も（普通）高校時代、一部の例外を除けば、英語の授業に関しては、他の文系や理系の生徒とほぼ同じ時間だけしか受けてこなかった。大学に入っても一般／教養科目としての英語は、他の専攻と同程度の科目数である。状況が異なるのは専門科目であるが、1, 2名の専門科目担当外国人教員の存在を除けば、ほとんどが日本人教員であり、授業は他専攻同様、英語の文献の購読であった。それを続けること、すなわち実質、「読む」ことによって英語力を伸ばしてきたのである（海外留学したり、一部の特別な大学や、英会話学校に通っていたりすれば話は別であろうが）。

日本において、英語が日常で使われることはほとんどない。ある種の特別な環境＝学校において、文字を使つての「学習」が行われる。したがってどのレベルであっても、文字や本を読めるようになることは、日本における英語学習では必須なのである。そして小学校低学年では国語の教科書の「音読」が宿題として課されるのが常である。つまり、ある程度母語として日本語が話せるようになった後でも、日本語を音読することは、言語学習、特にその初期段階では効果的であることが経験的に理解されており、その習慣が継承されてきている。よって卒研で英語の論文を読む、加えて「音読」もさせることが、学生の英語力を伸ばす上でも有効であると経験的に言うことができよう。

ただここで外的動機の設定に関し、非常に示唆的なことが前出の「GTEC 通信 Vol. 53」に書かれているので、引用しておく。それは、高校の理科教諭である山田先生の「高校時代に英語アレルギーにならないことが大切」との指摘である。山田先生自身、博士課程進学を諦めた理由の一つに「英語」があったとして、「科学の世界では「情報収集」と「情報発信」の2つの場面で英語が求められます。（中略）つまり、英語ができないと、研究に必要な情報を手に入れられないということです。また、理系の大学院入試は「専門科目」と「英語」を課するのが一般的なので、大学入試以来英語を勉強してなかった学生にとっては悪夢ですね（中略）博士号を取得するには、科学誌に論文が2本掲載されないといけないんです。もちろん英語の論文ですよ。それを知った時に、「自分には厳しいな」と悟ってしまいました

（下線は原文のまま）と述べている⁹⁾。

繰り返しになるが、小山高専においては自分の興味に特に忠実な学生がとて多いと考えられる。そしてその興味の赴く先を、高校生と同じ時期から追求できる環境があると中学生には宣伝しており、また実際、存在もする。そのような環境の中で、自分が興味の持てる対象のみに集中し、つまり小山高専だからこそ長所や才能を大いに伸ばせた学生も多いことであろう（当然、その逆の例もあろう）。ということは、本校には、内的動機を持つ自律的な学生の例は別として、学生の興味が向かない対象が存在することを多少は認めるという寛容さもあつたように思われる。

しかしながらそのような寛容さを許容する余裕は現在、本校からはなくなりつつある。全ての科目において万遍なくある程度の成果を上げることが学生には求められている。ただ、小山高専を希望する学生にはこれまで述べたような傾向があると考えられ、加えて現代の学生の特徴として、以前よりも好き嫌いを明確に表現する傾向があるのは、教員としての経験が語るところである。だとすれば、外的動機の設定にあたっては「英語アレルギー」を作らせず、自ら英語を勉強する姿勢を涵養する（その結果としてGTECやTOEICの平均点を上げる）ため、以前よりも慎重な対応が求められるということになるだろう。

6. おわりに

本稿では平成23（2011）年度から平成25（2013）年度までのGTECとTOEIC-IPの、各学年における総合点の平均点の推移を報告し、更には同学年における全国平均点との比較を行った。加えてTOEIC-IPに関しては、上記年度間における学年、学科ごとの受験者人数の推移を報告し、その結果に対し、考察を加えた。

他の科目同様、いやそれ以上に英語学習には時間がかかる。例えば子供は5, 6歳にもなれば自らの母語を（年齢相応に）話すことができるようになる。しかし当然、言語データのインプットがなければアウトプットはありえない。では5歳まで、どの程度の時間、母語のインプットがあるのかここで考えてみよう。仮に一日平均母語接触時間を3時間として単純計算してみると、5

（歳）×3×365（日）×60（分）＝328,500分と

なる。一方、一般英語の「授業時間数」は、小山高専の分だけを考えれば 20 (単位数) $\times 30$ (週数) $\times 60 = 36,000$ 分、中学校の時間数を考慮して 2 倍しても $72,000$ 分であり、これは子供が 6 歳までに母語に触れる時間の約 5 分の 1 である。この差から分かるように、母語獲得の場合と同じように断片的で不完全、系統立っていない英語データを、一般英語の授業時間のみでインプットするだけでは、時間が足りなさすぎるのである。ただ系統立って学習したとしても、やはり一般英語の授業時間だけでは少なすぎであり、よって一般英語の授業しか受けていない英語学習者の場合は、自らその足りない時間を補う必要がある。

「馬を水辺に連れていくことはできても、馬に水を飲ませることはできない」とのことわざにもあるとおり、教員にできるのは動機付け、手助けのみであり、実際に学習するのは学生である。学生が興味を持って授業に望んでいなければ、どのような素晴らしい教授法を駆使しようとも効果はなく、教員の自己満足にしかならない。したがって、どのようにしたら学生達の中に自ら英語に取り組む姿勢を涵養できるかが英語教員の最も苦心するところであるが、本稿で示した、特に専攻科 1 年生の IP テストの平均点の推移は、外的動機が存在が重要であることを改めて認識させてくれよう。

参考文献・参考資料

- 1) 国際ビジネスコミュニケーション協会 2014. 『TOEIC プログラム DATA & ANALYSIS 2013』 Available at http://www.toEIC.or.jp/library/toEIC_data/toEIC/pdf/data/DAA.pdf
- 2) ベネッセコーポレーション 2010. 2009 年度「GTEC 英語力向上校」「GTEC 英語力優秀校」『GTEC 通信 Vol. 62』 Available at http://gtEC.for-students.jp/gtecmag/contents/vol62_1.htm
- 3) 国際ビジネスコミュニケーション協会 2012. 『TOEIC プログラム DATA & ANALYSIS 2011』
- 4) 国際ビジネスコミュニケーション協会 2013. 『TOEIC プログラム DATA & ANALYSIS 2012』 Available at http://www.toEIC.or.jp/library/toEIC_data/toEIC/pdf/data/DAA2012.pdf
- 5) ベネッセコーポレーション 2009. 理系こそ英語—大学で問われる理系の語学力—『GTEC 通信 Vol. 53』 Available at http://gtEC.for-students.jp/gtecmag/contents/vol53_1.htm
- 6) 堀越二郎 1970. 『零戦 その誕生と栄光の記録』 角川書店 (2012 年初版発行)

7) 西郡 大 2012. 大学入試制度がもたらす遡及効果——受験生の主観的成長感から何が見えるか Journal of Quality Education Vol. 4 pp. 93-110. 国際教育学会 Available at http://sfi-npo.net/ise/quality_education/no4_downloadfile_5.pdf

8) 小野雄一、長谷川誠、有坂顕二、足立綾 2009. GTEC に見る英語 II における授業改善報告 『小山工業高等専門学校研究紀要 第 41 号』 pp. 17-26.

謝辞

本稿の執筆は、大久保校長の薦めによるものである。また専攻科長の亀山先生から貴重な助言をいただいた。記して感謝したい。言うまでもなく、本稿におけるいかなる不備もその責任は筆者にある。

注記

注 1) 平成 24 年度の実績では、高専生は、公開テストでは $6,297$ 名が受験し、IP テストでは $17,232$ 名が受験している⁹⁾。これを平成 25 年度の実績と比較すると、25 年度では高専生の公開テスト受験者数の増加と、IP テスト受験者数の減少が観察される。このことは高専 (生) の関心が公開テストに移りつつあることを示しているかもしれない。小山高専においても同様の傾向が見られることは、4 節において触れる。

注 2) 小山高専における GTEC 採用の経緯については、小野他 (2009) を参照⁹⁾。

【受理年月日 2014 年 9 月 30 日】